

# 疑似科学を利用した科学哲学入門教育

伊勢田哲治

京都大学 文学研究科

本提題では、提題者自身が担当してきた全学教育科目としての科学哲学入門の授業を手がかりに、科学基礎論関連科目の一つとしての科学哲学の授業のありかたについて考える。提題者は、創造科学、占星術、超心理学、代替医療など、いわゆる疑似科学を例にとりながら、正統的な科学とこれらの分野で何が違うのか、それが哲学的にどういう意味をもつのかといったことを考察する授業を行ってきた。こうしたテーマは文系・理系それぞれの学生の興味を引き、一定の教育成果をあげてきた。

この授業を手がかりとして、本ワークショップに課せられた問いにそれぞれ答えていきたい。まず、一般学生むけの科学基礎論教育としてとらえたとき、科学哲学教育の一つの眼目はある程度抽象的なレベルで方法論について論じることだと考える。通常の科学解説や科学コミュニケーションにおいては、科学の内容的な知識に重点がおかれ、そうした情報がどういう根拠で知識と見なされているのかという方法論の部分は省略されることが多い。実験手法などが解説される場合でも、方法論の構築を支える論理には踏み込まないだろう。科学哲学の授業はこうした欠落を補うかっこうの場である。さらに言えば、科学を批判的思考の対象にするという態度自体も科学哲学に特有のものであり、科学哲学教育のもう一つの眼目とあってよいだろう。疑似科学を用いた授業は、方法論に焦点をあて、科学や疑似科学を批判的な思考の対象にする態度を実践するという点で、まさに好適な材料を提供する。

疑似科学を使った授業で一つ問題となるのは、学生が必ずしも学ぶ必要がないことに結果としてかなりの時間を割くことになる点である。たとえば創造科学や占星術の細部について勉強させるくらいならば、正統的な生物学や天文学の常識を教えるべきだという考え方はありうる。もう一つ問題となるのが、科学哲学的な論争をおしえることとの兼ね合いである。たとえば反証主義的な考え方は科学方法論のリテラシーとしては非常に有用だが、科学哲学上の論争においては深刻な欠点が指摘されてきた。リテラシー教育という側面を重視することで本来の科学哲学の内容を控えめにしなくてはならないとしたら本末転倒である。

以上のような問題点はあるにせよ、科学哲学教育には、他のタイプの科学入門教育にはないような教育効果が期待できる。その一つが応用力である。ある程度抽象的なレベルで科学の方法論を理解することで、それまで見たことがないタイプの研究についてもある程度判断がつくようになる。たとえば、新聞で科学に関連する記事を読む際などに研究の手法がどのくらいしっかりしているのかある程度吟味することができるといった効果は期待できる。ただ、もっと大事なのは、そもそもそうした記事を見たときにそもそも吟味しようと思うかどうかである。単に科学リテラシー教育にとどまらない哲学教育には、そうした批判的態度の涵養という効果もあるはずである。